

眼科における肝炎ウイルス陽性者対策

研究分担者：戸所 大輔 群馬大学医学部附属病院 眼科
研究協力者：柿崎 暁 国立病院機構高崎医療センター 消化器内科
研究協力者：戸島 洋貴 群馬大学大学院医学系研究科消化器・肝臓内科

研究要旨：ウイルス性肝炎発見の契機としては医療機関での手術前等の検査で肝炎ウイルス陽性を指摘されることが最も多いため、手術件数の多い眼科におけるウイルス性肝炎陽性者対策はとくに重要である。今年度は、肝炎の知識が少ない眼科医および眼科コメディカルが適切な肝炎ウイルス陽性者対策を継続して行えるよう、「眼科医師・コメディカル向けウイルス性肝炎 Q&A 集（仮称）」の刊行を企画した。眼科医が手術前検査において肝炎ウイルス陽性例に遭遇する頻度は、月に 50 例の手術を行っている施設の場合、B 型肝炎で約 3 か月に 1 度、C 型肝炎で月に 1 度である。専門外であることに加えて遭遇頻度も少ないため、陽性者対応を行う際に活用できる対応マニュアル作製を企画した。まずはより頻度の多い C 型肝炎を対象とした。眼科医が選定した質問項目の回答を肝臓専門医が作成した。この冊子が眼科医によるウイルス性肝炎陽性者の拾い上げと肝臓専門医への受診につなげることに寄与するものとする。日本眼感染症学会において配布し、将来的には効果の検証も行いたい。

A. 研究目的

ウイルス性肝炎は日本人の約 40 人に 1 人が感染している国内最大級の感染症であり、B 型および C 型肝炎の持続感染者は 300 万人以上とされる。国はウイルス性肝炎総合対策の推進のため平成 22 年に肝炎対策基本法を制定した。平成 26 年には厚生労働省健康局長通知において、全国の医療機関に対し手術前等に行われる肝炎ウイルス検査の結果を受検者に適切に説明するよう通知している。

ウイルス性肝炎発見の契機としては医療機関での手術前等の検査で肝炎ウイルス陽性を指摘されることが最も多いため、手術件数の多い眼科におけるウイルス性肝炎陽性者対策はとくに重要である。しかし、眼科医にとってウイルス性肝炎は非専門領域であり、眼科医への啓発は十分ではない。我々は令和 5 年度に眼科医師、眼科医療従事者、肝炎医療コーディネーター、肝炎・梅毒に興味がある方を対象とし、群馬県庁において「眼科のための感染症セミナー」

を行った。その際に行ったアンケート調査では眼科医・眼科看護師のおよそ半数が陽性例対応で困ったことがあると回答した。また、今後聞きたい内容として、肝臓専門医への紹介や治療に積極的でない患者に対する説明の仕方が知りたいという回答があった。

一方、本研究班非専門医対策部会では、日本眼科医会と連携することで、日本眼科医会のホームページに肝炎検査の対応フローチャートやダウンロード可能な説明資料を掲載した。しかし、これらの啓発活動の効果は検証されていない。

以上の状況を踏まえ、引き続き眼科医および眼科コメディカルに対する啓発活動と実態調査を行った。

B. 研究方法

今年度は、肝炎の知識が少ない眼科医および眼科コメディカルが適切な肝炎ウイルス陽性者対策を継続して行えるよう、「眼科医師・コメディカル向けウイルス性肝炎 Q&A

集（仮称）」の刊行を企画した。群馬大学医学部附属病院眼科のデータでは、手術前検査における検査陽性率はHBs抗原が0.6%、HCV抗体が2.1%の頻度である（肝炎医療コーディネーター導入による肝炎ウイルス陽性者対応の適正化。戸所大輔ほか。臨床眼科 77(3): 329-334, 2023)。したがって眼科医が手術前検査において肝炎ウイルス陽性例に遭遇する頻度は、月に50例の手術を行っている施設でも、B型肝炎で約3か月に1度、C型肝炎で月に1度である。もともと専門外であることに加えて遭遇頻度も少ないため、ウイルス性肝炎陽性患者に対して毎回適切な説明を行うのは難しい。そこで、陽性者対応を行う際に用いることのできるコンパクトな対応マニュアル作製を企画した。

また、本研究班が行った6道県の眼科医会会員に対する術前肝炎ウイルス検査結果についてのアンケート調査に群馬県としても協力した。

C. 研究結果

1. 「眼科医師・コメディカル向けウイルス性肝炎Q&A集（仮称）」の作製

眼科医師・コメディカルが参照しやすいよう、極力コンパクトで平易な内容の冊子とすることを目指した。肝炎ウイルス陽性に遭遇する場合、B型・C型のいずれか一方が陽性であることがほとんどである。まずはより頻度の多いC型肝炎を対象とした。「C型肝炎とは?」「低力価陽性は紹介すべきか?」「どこの内科に行ったらよいか?」など実際に患者から尋ねられる可能性のある項目を眼科医の目線から選定した。回答は肝臓専門医が作成し、その後眼科医師・コメディカルにとって難解な表現があれば協議し修正した。より詳細な情報は巻末に資料集としてまとめ、必要時に参照できるようにした。現在作製中であり、7月に横浜で開催される第61回日本眼感染症学会で配布する予定である。

2. 術前肝炎ウイルス検査結果についてのアンケート調査

初本研究班による標記アンケート調査に群馬県としても協力した。群馬県眼科医会の協力を得て、アンケートはFAXによる回答とGoogle formによるweb回答を併用して行った。回答数は会員185名中72名であり、回収率38.9%だった。回答した医師の所属はクリニックが7割、残りは病院だった。陰性結果説明は64.8%の医師が行っており、陽性結果は約93%の医師が説明していた。

D. 考察

1. 「眼科医師・コメディカル向けウイルス性肝炎Q&A集（仮称）」の作製

手術前検査で肝炎ウイルス検査陽性であったとしても、眼科医師にとって主たる業務は眼科手術であるため、広く使用されるものにするためには、なるべく平易で手取りやすいものをめざす必要がある。詳しくすぎて分厚くなり、必要どころが探しにくい冊子ではほとんど使われない可能性がある。B型肝炎とC型肝炎で冊子を分けることで、それぞれの陽性例に遭遇した時に参照しやすいものをめざした。この「眼科医師・コメディカル向けウイルス性肝炎Q&A集（仮称）」によって、眼科医によるウイルス性肝炎陽性者の拾い上げと肝臓専門医への受診につなげることに寄与するものと考えられる。

2. 術前肝炎ウイルス検査結果についてのアンケート調査

群馬県眼科医会ではFAXとweb回答の併用によるアンケートは初めての試みだったが、良好なアンケート回収率だった。また、群馬県では以前に啓発を行ったこともあり、陰性・陽性とも結果説明を行っている割合が高かった。しかし、まだ結果説明を行わない医師が存在するため、引き続き啓発活動を継続することが重要であると思われる。

E. 結論

眼科医・眼科コメディカル・肝炎医療コーディネーターを対象とした啓発活動を続けるなかで、眼科スタッフにはウイルス性肝炎自体に対する知識が十分でないため、肝炎ウイルス陽性患者へ説明を行う際に参照できる冊子が必要である。日本眼感染症学会において配布し、将来的には効果の検証も行いたい。

F. 政策提言および実務活動

<政策提言>

なし

G. 研究発表

1. 発表論文

なし

2. 学会発表

なし

3. その他

啓発資材

なし

啓発活動

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし